

庄内平野が、その全てを凍てついた白亜の魔手に身を委ね、人々はじっと時の移ろいに耐える1月の末。黒川は少しずつ活気を呈してくる。里の依代よりしろを我が家に招き、盃を交わしながら神と交歓、垣根を払って終夜の宴……、王祇祭の準備が佳境に入るからである。若者たちは自信に満ちて自らの責を果たし、娘たちや若い嫁っ子は頼もしげに彼らを見上げる。壮老は自信に満ちて満足そうに頷き、子どもたちは歓声をあげつつ、己も何かを成さんと意気込む、頬そめて…。祭りに向けて内なる高ぶりを、静かに蓄えていく時期だ。

黒川は旧櫛引町の赤川右岸に位置し、約400戸、人口約1,700人ほどの集落である。地域のほぼ中央、小高い丘の上に春日神社を仰ぎながら、15の小集落が点在している。その春日神社は霊峰月山を遥拝するようにして、杉木立に覆われている。その昔は「春日四所明神」と呼ばれたように、神話の神々が四神、祀られているが、村人はあまり深くそのことを意識せず、土産神、祖霊の神、また森羅万象・八百万の神々として意識しているように思える。嫁がきたとき神に報告し、子が出来れば無事に生まれたことの礼と、先々のつつが無いことを祈り参詣する。正月は国家の久しきを、また例大祭には里の安寧を願う。もとより家内安全、五穀豊穡はいつでも祈る。日本のどこにでもある氏神様である。

この黒川になぜ能という芸能が500年以上にも前



春日神社 例大祭で「翁」を舞う筆者

から受け継がれてきたのであろうか。明治以降、幾多の有識人がその謎の解明を試みているが、いまだ歴史の中に埋もれたままである。観阿弥・世阿弥が能という芸能を不動の位置にしてから600年。そのわずか100年後に当時、最奥の辺境とも言える黒川に能が軟着陸した事実は、誠に歴史的な興味をそそることである。当時の黒川の民が、いかようにそれを望もうと不可能であり、何らかの力が働いたことは当然であろうし、歴史もまたそれを示唆している。いずれにせよ何らかの力が働いて、黒川の農民が能という、とてつもなく巨大で、不可思議で、不如意な

VALUE SIGHT

## 黒川能の伝統を守り 人々の知恵と努力

鶴岡市黒川地区で500年前に農民による能として誕生した黒川能。以来、少子化や過疎化という難題に立ち向かいながら受け継がれてきた。それは、氏子らにライバル意識を持たせ切磋琢磨すること、祭りを仕切る能太夫の苦勞、そして何より自らの里と芸能、信仰を守り抜こうという地区の人々の強い意志と努力の賜物である。

ものに取りつかれることになったのである。以来500年、黒川能下座の能太夫・上野與四太夫家は当代で20代目となり、それらは一系で続く稀有な家柄である。

黒川には組織として、春日神社の氏子組織、その氏子で構成する能座がある。さらに能座は上座と下座に分かれ、これらが切磋琢磨を繰り返してきた。この対立の構図は、芸能や祭りの進行にも色濃く示されていて、まさに継続の力となっているようである。ひとりだけでは失われていくエネルギーを、ライバルを置いて対立させることによって、さらに増幅させようというこの巧妙な手法は、黒川の祭りや芸能の大きな特徴なのである。これまで500年の歴史を刻むことが出来たことも、土着の信仰心を基にしながら、こうした人為的なプロデュースが見事に成

功したものだと考えられる。このような黒川能継続のための民衆心理の操作にはもう一つ方法があると思う。

王祇祭は春日神社の異例祭という位置付けであるが、王祇様と呼ばれる御神体が、一歩神社を出てしまうと、全ての責任と権限が、能太夫に移る。祭りを遂行する権利と義務が、能太夫の手に委ねられるのはわずか一昼夜だけであるが、神社つまり権力を離れて、太夫である民衆の手に移ることによって、その間祭りは自分たちが仕切ることになるのである。その解放感が、先に述べた対立の構図と相まって、

から就農したが、当時すでに長男や長女しか村には残らないようになっていた。そして、すぐに冬期間の出稼ぎが待っている。出稼ぎによって現金収入が増えてくると、村の家々が次々と新しくなった。田園の風景も基盤整備事業が始まってから、すっかり変わっていった。今度は機械化対応の出稼ぎが続いていく。そして減反の影響……。「100年1日の如く」というが、「500年1日」で過ごしてきた村の暮らしぶりが、瞬時の間に変容を遂げてしまったのである。祖先たちも投げ出してしまいたくなるような試練が幾度となく目の前に立ちはだかったことであろう。飢饉、大火、重税、支配者の交代、世界大戦……。しかしそれらはいわば外敵であった。その一方で、黒川能は自らの里と芸能と信仰を守るために、内に小さく団結する技を体得し、歴史の重みを語り継ぐことに成功した。

そうしてみれば、現代は内なる崩壊であろうか。バブル以後の黒川では祭りの存続が危ぶまれるほどに、神宿を忌避する家族が増えてしまった。家屋構造の変化、脱農、つまり総サラリーマン化による時間的な制約、当然かとも言える土着信仰心の希薄化、地域コミュニケーションの一方通行……。黒川能は王祇祭がバックボーンである。国立能楽堂の舞台やNHKホールのステージに立つよりも、二間四方の組み立て舞台にあがることを、能役者は何より望むのである。祭りと一体になることで神と地域と芸が深く融合され、渾然とした至福の時を得られることを本能的に知っているし、また歴史がそうした感覚をしっかりと植え付けているのである。幸いなことに、若い役者たちはそういった感覚をしかと自覚していないまでも、地道に稽古に励んでいるし、子どもたちは1月になれば毎晩連れ立って師の元に集い、謡う、すでに小さな対抗意識を持ちながら……。神宿の問題も現在は少し鎮静化に向かっているようである。祭りの形態と芸の精神を残し、伝えていこうとすれば、歴史の力に頼るほかに当然われわれの努力が求められてくる。先人たちが通った道をわれわれも歩みつづけるのみである。

## 庄内

## 抜く



王祇会館 館長

齋藤 賢一

500年もの間、黒川の農民に祭りを続けさせる原動力となっている。

祭りはいつも神と一体であったが、そこに本来娯楽である芸能が加わったことによって、村人は神宿に集い、父や、子、夫を探し出すようになるのである。今では想像も出来ない暗い灯明の下で、肉親の一挙手、一投足に天にも登るほどの至福を得ていたのであろう。私が若い頃、つれづれに集まって般若湯を頂いていた老婦人たちから、我が芸の欠点を見事に指摘されたことがあった。自分でも意識していたのであった。身が縮んでしまった思い出もある。

昭和40年代以降、日本はすさまじい速さで社会構造を変革させてきた。私は東京オリンピックの翌年

### ■ 齋藤 賢一 (さいとう・けんいち)

1947年鶴岡市黒川（旧櫛引町）生まれ。  
黒川能上座能太夫（座長）、王祇会館館長。  
王祇会館  
〒997-0311 鶴岡市黒川字宮の下253  
TEL 0235-57-5310・FAX 0235-57-5311